

十門分類の事ども

教授 佐賀枝 夏文
(社会福祉学)

「書香」の原稿依頼をいただいたので、図書館に所蔵されている書典籍の醸し出す香りとともに、想起することをつづってみたい。原風景は、響流館として図書館が堂々とした姿をあらわす前の、現在の至誠館が図書館だったころに戻るところからはじまる。谷大に入学してすぐに、わたしの「居場所」になったのは、図書館の二階の自習室のデスクだった。広いデスク、据えられた蛍光灯スタンドもお気に入りだった。なによりも、天井が低く「隠れ家のロフト風」だったことだった。そこで幾度となく、授業のチャイムをやり過ごしたことが思い出される。

谷大を巣立ち、社会福祉の実践へすすんだ、そして、12年を経て、短期大学の教員として戻った。わたしの席と決め込んでいた椅子に座った時、その至福ともいえる味わいを今も忘れないでいる。そのおり、ひそかに「誓った」・・・、一言では尽くせないが、その後の教員研究生活の支えとした。

学生時代に学祖清澤満之先生について吉田久一先生が上梓された吉川弘文館の人物叢書『清澤満之』を手にした。動機は谷大生だから、というきわめて純粋な気持ちだったとおもう。感銘深く手にした、この書籍は、いくつかの賞も受賞し、また、吉田久一先生の研究の原点ともなったものである。



このことが記憶にあっつか、所属した日本仏教社会福祉学会で吉田久一先生とお会いする機会を得た。かけ出しの研究者にやさしくお声をかけていただいたのもご縁となったとおもう。しかし、すぐには、教えを乞いに伺う知識もなく、時間が過ぎた。

谷大に戻り、図書館の自習室でたてた「誓い」を、遅々としたあゆみではあったがはじめることになった。それは「真宗大谷派の社会事業研究」として、明治期から調査することであった。道を開いたのは、長年図書館に関わった谷大同期の稲垣淳造氏であった。稲垣氏から真宗大谷派の宗報の検索、同時期の新聞、年表との照合などの手ほどきを受けた。明治期から宗報の検索を中心に作業を進めた、明治期は監獄教誨を中心に、様々な真宗大谷派の社会貢献を発掘した。図書館の和漢書分類目録がいまもまざまざとよみがえる。大谷派慈善協会の出版した機関誌『救

『救済』を和漢書分類目録から発見し、貸し出しを受けて閲覧したのを昨日のように思い出す。枚挙する、人物は社会福祉の先人たちであった。調査がすすむにつれ、わが国の社会福祉を開いたのは真宗大谷派と判明したときは、やや興奮し小躍りした。先行研究として吉田先生の研究論文のあることを知った。吉田先生とご縁を結んだのは、長らく同朋大学の社会福祉の教員で、現在四天王寺大学の教員である近藤祐昭氏であった、近藤氏は遠路もいとわず吉田先生の社会事業大学へ案内していただき、ありがたいご縁をいただくことになった。吉田先生から、大谷派慈善協会『救済』を研究するよう励ましをいただいた。それを機に、先生の末席の教え子として長らく教をこうことになった。大谷派慈善協会発行『救済』は、2001年に約15年の調査を終

えて不二出版から復刻が完成した。そのあゆみは真宗大谷派の社会課の設立につながり、現在の教育部、青少年センターへと歩みをすすめている。

また、現在の宗門の社会とのパイプは武内了温師である。師の偉業として社会課就任と同時期から宗門寺院の開設になる日曜学校、また、宗門仏教青年会、スカウトなどの活動の啓蒙、連絡、研究誌として『児童と宗教』が出版された。本誌の復刻の準備が完了し不二出版から2013年12月より刊行がスタートする。全15巻別冊の形式で復刻することになった。

谷大に関係された諸先輩、その大きな足跡はわが国の教育、社会福祉へ偉大な業績を残していただいたことに深く感謝申し上げたい。



旧図書館 2F 自習室



『救済』



『児童と宗教』